

自然談議・科学談議

動植物の地下銀座

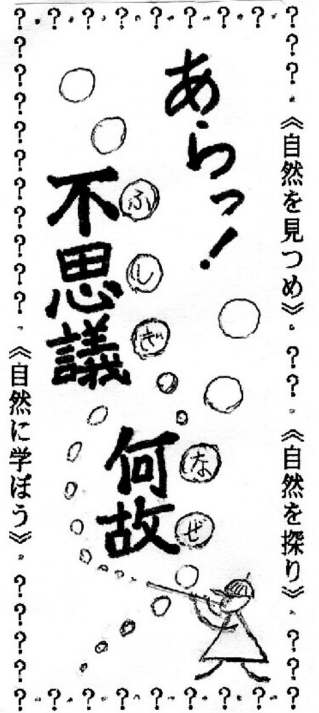
(天然記念物)

植物が立派に生長するには、地中の根や茎が大きく影響を与えていると思う。また、昆虫や小動物はその地中の根や茎から栄養分を摂ったり、地中の温度を上手に活用したりして生長しているのである。今回は、その動植物が集合して生活している場所を、私は勝手に自称して「動植物の地下銀座」と呼ぶことにしている。

①【セミ類の幼虫】

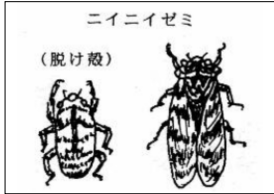
地下銀座では、「セミ類の幼虫」も、寒い冬の時期にここで暮らしているのである。それも一年や二年ではない。五年六年七年と長い年月暮らしているのである。

その年月はセミの種類によって異なるが、長いものは七、八年もこの地下で暮らしているのである。その間、様々な木々



NO. 46

文・題字
渋谷 一夫



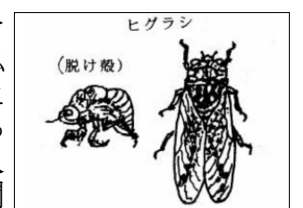
この「ハルゼミ」に続いて、「ニイニイゼミ」

地上に顔を出すのは、セミの種類によって異なるが、まず春の初め頃、「ハルゼミ」が自分の好きな樹木の根元に穴をあけ、その木の幹を少しずつ上り始め、途中で羽化して飛び出し、同時に愛の季節を迎え、メスを呼ぶために大きな声で鳴きだすのである。

や草の地下茎の養分をすすめ取り、生き永らえているのである。そして、春暖かくなると目を覚まし、様々な植物の地下茎から栄養分を横取りし生長して、次第に地上の生活に変わっていくのである。

が鳴きだし、更に「ジージー」と「アブラゼミ」が耳うるさく鳴きだし、七月八月になると、更に大声で「ミーンミーンミーン」と「ミンミンゼミ」がやかましく鳴きだす。やがて、秋涼しくなると、「カナカナカナ」と「ヒグラシ」というセミが鳴き始める。だから春三月頃から秋九月頃までは、様々なセミの大合唱となり、冬を迎えるのである。

この大合唱中にも、メスとオスは交尾し、メスは自分が上ってきた樹木で産卵するのである。そこで生まれた幼虫は、自力でその樹木の根元の方へ下りていき、その樹木の根元で穴を掘って地中にもぐり込み、その地下茎から栄養分をいただき、



また数年間の地下生活に入る。そのセミの自然の営みを私たちは是非守ってやりたいものである。

②【セミの幼虫余話】

北海道の知床半島で、カラマツの森林を保護するために、古木を切り捨てて、そこに新しい苗木を植えて、森林の再生を始めたところ、そこにヒグマが現れ、その根元部分をくいあらしてしまい、大きな被害を受けているという。ヒグマが何故、このカラマツの苗木の根元を荒らしているのか調査したところ、その苗木の根元に沢山のセミの幼虫がいたそうである。

古いカラマツを切り捨て、若い苗木を植えたところ、そこに一緒に生きていた「フキ」や「セリ」も大発生したが、この「フキ」や「セリ」はエゾシカの好物で、たちまち食べつくされてしまったという。

この「フキ」や「セリ」はヒグマの好物であったし、新しい苗木の根元は、太陽の光がよく届き、土壌に窒素がたまり、セミの幼虫のエサになっていた。その根元にセミの幼虫が棲みついていたのである。そのセミの幼虫をヒグマが食べるために、カラマツの苗木の根元を掘って荒らしてしまったのである。そのせいで、カラマツが順調に生長しなくなり、二次被害を受けているという。

その昔、ヒグマは川を上ってきたサケを食べていたが、その食べ残したサケの残り粕が、カラマツの根元の養分になっていたこともあるという。

これは、人間の自然破壊、開発が招いた二次被害、三次被害である。考えるべきことである。幸い、わが家の周辺にクマはいないので安心だが、動植物と自然の共生について、我々は何と考えるべきだと思っている。